

教職課程研究報告発刊にあたって

堀 憲一郎

(久留米工業大学 教職課程運営委員長)

平成 27 年 12 月に中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」が出されました。そこでは、社会環境の急速な変化や学校を取り巻く環境の変化を受け、これからの社会で教員にどのような資質・能力が求められるのか、またその為に教員を養成する大学にどのような課題があるのかが指摘されています。

答申では、教員として必要な基礎的・基盤的な学修を行うこと、実践的指導を行うための基礎を培うこと、教職課程としてのキャリア形成にかかる教育（学校体験等）、発達障害を含む特別な支援を必要とする生徒への理解と指導、ICT を用いた指導法、アクティブ・ラーニング等の主体的・対話的で深い学びを実践する基礎を身につけること、など今日新たに生じてきた教育的課題に関して、大学における養成段階から対応していくことの必要性が指摘されています。

また、そのために、各大学の教職課程及びその担当教員に対しても、教職課程の質の保証・向上に取り組むことが求められています。

今回、『教職課程研究報告』を発刊することにより、このような教育をめぐる新しい様々な課題に対応していくことのできる教員の養成を目指して、教育内容の充実と教育方法の改善につなげていきたいと考えています。

〔論文〕

総合的学習における国語の能力養成の優先性

立花 均

(元 久留米工業大学共通教育科)

1. 国語の能力こそが最優先

学習指導要領には「総合的な学習の時間」の目標として、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力の育成」ということが示されている。

そういった資質や能力としては様々なものがあり得るが、ここではそれら諸々の資質や能力に対して国語の能力がどのような役割を果たすのか、またそれらを伸ばすためにはその基礎として国語のしっかりした能力が必要であることを検討し、国語の能力こそが総合的な学習の時間において最優先で養成しなければならないものであることを検討していきたい。

そのことを考えるための手がかりになるのが、アメリカで行なわれた大規模な言語力の調査である。その調査のことを、国語教育について独特の提言を行なった石井 勲^{いさお}は次のように紹介している。

「リーダーズ・ダイジェスト」誌に、……アメリカの人間工学研究所〔the Human Engineering Laboratory〕が行った“言語力調査”の結果が報告されたことがあった。それに拠ると、「……^よ膨大な人々に対して言語力の調査を行ったところ、地位の上下や収入の多少が、言語力と全く正比例して居り、また、学校の成績も同様であった」と述べられてゐた。⁽¹⁾

石井がここで紹介しているのは、ブレイク・クラーク (Blake Clark) による「言葉の不思議な力」というタイトルの記事である。そこでは次のように書かれている。

自分の職業の分野で第一人者となるには、……適性をそなえているだけでは不十分であることをオコナー〔人間工学研究所の Johnson O'Connor（一八九一～一九七三）〕は発見した。……

国語の力〔ここでは語彙力〕が豊かなことが重要だというオコナーの説を一番よく実証したのは、三十九の大製造工場の幹部と監督級〔管理職クラス〕に行なった……テストである。テストの結果、……国語の力の差は、実に決定的で興味深いものだった。二七二点を最高点として社長、副社長級は平均点二三六、支配人級一六八、監督級一四〇、職長級一一四、主任級八六となっており、ほとんどどのテストでも地位の上下と収入が国語の力と正比例していた。……

国語の力はまた、学校の成績にも関係する。イリノイ大学の新入生二千四百三十人に言語テストを行ない、そのときの成績とその後四年間の平均点を比較してみたところ、専攻科目のいかんにかかわらず、入学時に最高点を取った学生は、最高学年でも最高の成績を示していることがわかった。⁽²⁾

ここで行なわれた国語力のテストとは、語彙力のテストである。同記事ではその内容を、「オコナー式テストは、……各テスト語の意味に最も近い類似語を挙げさせる〔四つほどの選択肢の中から選ばせる〕ことにしている。テスト語は……十万語くらいの読み物の中に、一、二度は出て来るような言葉で、ごくやさしいものから、かなりむずかしいのまでである」と説明している。

そして同記事は、オコナーの行なった他の調査も踏まえ、次の結論を述べている。

これではっきりわかることは、国語の力と成功の程度とはどの社会でも正比例しているということである。……工学、医学、法律その他の自由職業で成功している人は、例外なくよい成績を示している。⁽³⁾

このような結論に対しては、それは語彙力によるのではなく、学校教育の影響によるのではないかという疑問も出てくるだろう。同記事はそのような疑問に対し、オコナーが行なった別の調査結果を紹介することで次のように答えている。

しかし国語の力が豊かなことも成功も、要するに学校教育が決定するのではなかろうかとの疑問を解明するため、オコナーは十五歳で学校をやめて、粒々^{りゅうりゅうしんく} 辛苦のうえ重役まで漕ぎつけた立志伝^この人二十人の国語の力を調べてみたところ、百五十のテスト語中、間違っただけはたった七語だった——ということ、大学出の重役と何ら変わらないということである。⁽⁴⁾

最初に見たクラークの記事にあったように、社長、副社長から主任クラスに至るまでの点数には、地位の高さと比例する形で、二三六点、一六八点、一四〇点、一一四点、八六点といった大きな差が出ていた。日本のように年功序列の要素が強い所では、これほどの差はつかないのかもしれない。しかし逆に言えば、アメリカのような所では社会的な評価がそれだけストレートに地位に反映しており、社会的な評価と国語の力が比例していることがより一層はっきりと出たということではなかろうか。

このような結果が出たのは単にアメリカや日本という風土の違いによるのではなさそうだとということを見ておくため、語彙力の調査ではないが、日本で行なわれた似たような調査を一つ紹介しておきたい。それは、ドイツ文学者・文芸評論家の西尾幹二^{かんじ}が報告している、彼の勤務先であった電気通信大学で行なわれた調査である。

約十年前、入学試験の成績と卒業成績の相関関係を調べる追跡調査が私の大学〔電気通信大学〕内で行われたことがある。電子工学とか情報数理工学といった学問を学ぶ学生にとって、入試の成績が卒業時の成績と正確に照応したのは、何と驚くべきことに国語であった。入学試験では国語だけやっていたらよいのではないかという冗談^{じょうだん}が囁^{ささや}かれたほどである。⁽⁵⁾

私も、大学で就職指導をしている先生に、「企業の就職試験というのはどのようなものですか」と聞いたことがある。するとその先生は、一言、「国語の試験ですよ」と答えてくれた。

たしかに、面接や作文などの「人物を見る試験」というのは、ある意味でどれも国語の能力を試すものと言える。大学で専攻した分野の基礎学力は大学を卒業した(すなわち、規定の単位を修得した)というだけでOKとする企業も多いよう

で、そうすると後は、社会人になった時の総合力を見ればよく、それには国語の試験をすればよいということなのだろう。

各企業は、さきほど見たオコナーが行なった調査については、おそらく知らないだろう。それでも、その調査結果のようなことは、長年の経験から知っているのではなかろうか。つまり、社会人としての総合力は国語の能力にかかっており、それがしっかりしていない人は社会人としての総合力に欠けるといったことは知っているのだろう。そのため、就職試験では国語の能力を試す試験をする企業が多いのだと思われる。

また、中学校や高校の先生方からよく聞くのは、「どのような科目の能力も、その生徒がもっている国語の能力以上には伸びない」ということである。たとえば、英語や数学といった科目の能力を生徒につけさせるには、もちろん、その科目について教え、その科目の勉強をさせなければならない。しかし、いかにその科目の勉強をたくさんさせても、国語の能力以上にはその能力を伸ばすことが出来ないというのである。したがって先生の中には、「自分の科目よりも国語を教えさせて欲しい。国語の能力を生徒につけさせなければ自分の科目の授業が成り立たない」と言う人もいるくらいである。

こういったことからすると、どのような分野の仕事や勉強をするにしても、その分野の能力を伸ばすことに取り組む前に、まずは国語の能力を伸ばすことを最優先でしておかなければならないことが分かる。それをしておかなければ、どのような分野に取り組んだとしても、そこで行なった努力が報^{むく}われずに終わる可能性が高いからである。

また子どもは、将来どのような分野に進むのかはまだはっきりしていないし、またどのような課題に取り組まなければならないようになるかも知れない。そしてそうであればこそ、子どもには、何か特定の分野の教育に力を入れるよりも、国語の能力をつけさせることを最優先でしておかなければならないことも分かる。それをしておきさえすれば、子どもが将来、どのような分野に進むにしても、またどのような課題に取り組むにしても、そこで払った努力にふさわしいだけの成果や評価を得られるかどうかは、国語の能力以上にはなかなか期待出来ないからである。

それにしても、どうして国語の能力があらゆる分野の能力にそのようにストレートに反映するのだろうか。

2. 国語の能力^{イコール} = 情報処理能力

そういった国語の能力とは、「学校教科の一つの国語（数学，理科，社会などと並ぶ国語）」の知識のことではない．たとえば夏目漱石^{なつめ そうせき}の作品をどれだけ知っているかとか，芭蕉^{ばしやう}の名前を漢字で書けるかといった知識ではない．またそれは，「文学」という，言語の限られた一領域についての能力のことでもない．すなわち，小説や詩などの鑑賞能力，読解能力，創作能力といった，それらに専門的にたずさわったりそれらを趣味とする一部の人たちだけに必要なものでもない．そこでの国語の能力とは，日常生活や仕事を行なう中で，筋道^{すじみち}の通った文章の読み書きが出来るかどうか，あるいは筋道の通った会話のやりとりが出来るかどうか，また筋道の通った思考をみずからの言葉で出来るかどうかといった，だれにとっても必要な，言わば「情報処理能力」なのである．

情報処理能力というと，普通は，コンピュータを使いこなす能力とされている．しかし，一人一人の人間にとっての最も基本的な情報処理能力は，実はコンピュータの操作能力ではなく，国語の能力なのである．

というのも，人はみな絶えず情報処理を行なっている一個のコンピュータのようなものであるが，その情報処理は主に国語を使って行なっているからである．すなわち，コンピュータは，①「インプット」，②「記憶・演算」，③「アウトプット」といった情報処理を行なうが，人もそれと同じように，①外界の情報（すなわち，外界の事物，他の人の話や文章といった情報）を自分の頭にインプットし，②そうやって得た情報を頭の中で記憶したり，それらを使って思考や判断をしたりし，③また頭の中でまとめた情報を外界に言葉や文章としてアウトプットするといった情報処理を行なっている．そして，人はそういった情報処理を主に国語を使って行なっているのである．そのため，その人の情報処理全般のレベルは国語の能力によってかなり決まってしまうことになり，その結果，仕事での評価や学校での成績などが国語の能力に比例することになっているのである．

それでは人の情報処理は，その人の国語の能力によってどのように行なわれているのだろうか．国語の能力というものは，大きくは，「単語の能力」（語彙力）と「文章の能力」に分けられるが，まず単語の能力についてそのことを見ていくことにする．

前節で見たリーダーズダイジェストの記事を紹介していた石井勲は，また次の実験についての報告もしている．

ここにいろいろな色や模様のある蝶^{ちょう}の標本を納めた箱があって、その中に、「地^ちが黄色い色をした羽に、縞^{しま}模様のある蝶」が一匹あったとしよう。その蝶を一匹だけ取り出し、これを数人の幼児たちによく観察させる。

さて、それから数時間経^たった後、この蝶を元の標本箱の中に戻し、幼児を一人ずつ呼び出して、「さっき見た蝶はどれだったかな、当ててごらん」と言って当てさせるといふ実験である。

この実験で、「正しく言ひ当てることの出来る幼児は、必ず“黄色”といふ言葉も、“縞”といふ言葉も、どちらも知ってゐる幼児に限られる」といふことが判^{わか}ったのである。この言葉のどちらかでも知らない幼児には、決して正しく言い当てることが出来ないのである。⁽⁶⁾

このような結果が出た理由を、石井は次のように説明している。

〔そのようなことになるのは〕……“黄色”といふ言葉を知らない幼児には、黄色い色は目に入りはするのだが、それを意識し、記憶するまでには至らないからである。

つまり、“黄色”といふ言葉を知ってゐて初めて「この蝶は黄色いな」と思ふことが出来るのであって、この言葉を知らない幼児には、「この蝶は黄色い」と思うことが出来ないし、従って、「黄色い蝶だった」という記憶が出来る訳がないのである。⁽⁷⁾

つまり、外界のものを「よく見て、頭に入れる」といっても、人はそれを（たとえば、蝶を）そのまま頭蓋骨^{ずがいこつ}の中に入れるわけではない。その外界のものを言葉に変換し（黄色い蝶というものを、「黄色い蝶」という言葉に変換し）、その変換した言葉を情報として頭の中に入れるのである。したがって、その外界のものについての言葉を知らなければそれを情報に変換することが出来ないため、いくら「よく見て」もそれを頭の中に入れることが出来ないのである。

小さな子どもは、いくら言いきかせても、靴の右と左をよく間違える。しかし、ある時期からびたりと間違えなくなる。これは次のようなことではなかろうか。すなわち、子どもにとって「右」「左」という言葉は、「上」「下」という言葉と違い、区別^{はし}がかなり難しい。親も、「お箸をもつ方が右で、お茶碗をもつ方が

左」などと言っていつまでも教えている。そして、そのように右・左という言葉
をきちんとマスター出来ていない時期の子どもは、まだ外界のものに右・左とい
う言葉を当てはめることが出来ないで、外界のものの右と左を認識できない。
そのため、その子にとっては靴に右も左もなく、ただ「靴」しか存在しないので
ある。ところが、右・左という言葉を実マスターすると、途端にその時から靴に右
と左があることが分かってくるのだと思われる。

しかし、外界のものを捉えるといっても、このように「単語」（「黄色」や
「右」「左」といった単語）によるだけでは限界がある。たとえば、推理小説に描
かれているような、一つの事件が起きた背景やその時の関係者の心理の動きとい
った複雑でデリケートな状況は、いくら単語をたくさん並べても捉えられるよう
なものではない。それでは、人はそういった状況をどのような情報に変換して頭
の中に入れるのかというと、「文章」にしてである。すなわち、推理小説ではそう
いったものを延々と何頁にもわたる文章で描いているが、それと同じように、人
はそういった状況を文章に変換し、その変換した文章を情報として頭の中に入れ
るのである。したがって、そういった複雑でデリケートな状況を文章として描け
るだけの能力をもっていない人は、目の前にいくらその状況があっても、「黄色」
や「縞」という単語を知らないためにそういった特徴をもつ蝶を捉えることの出
来ない子どもと同じように、「見れども見えず」ということになるのである。

もっとも外界のものを捉えることには、言葉だけでなく、形、色、^{てざわ}手触り、^{にお}匂
いなども関わっており、そういったものと言葉とが非常に複雑に^{かんしょう}干渉し合いなが
ら、外界のものを捉えているのである。しかしそれにしても、人が外界のものを
情報として捉える際には、単語や文章といった言葉が大きな役割を果たしている
ことは確かなのである。

したがって人は、いかにたくさんの経験をして、そこで起きたことをどれだ
け自分の中に情報として取り入れて蓄積出来るのかは、本人の国語の能力（＝情
報への変換能力）に大きく制約されていることになる。たとえば、百の分量の経
験をして、本人の国語の能力がそれを十の分量の情報にしか変換出来なけれ
ば、その人の頭の中には十の情報しか入ってこないし残らない。ところが本人の
国語の能力が、百の経験を八十の情報に変換出来れば、その人の頭の中には八十
の情報が経験として蓄積されることになる。したがって、多くの経験をするこ
とももちろん大切だが、それをする前に国語の能力を高めておかなければ、^{ざる}水

をすくうように、「見れども見えず，経験すれども経験せず」ということになってしまうのである。

また，経験といった「事柄」ではなく，他の人の「言葉」（すなわち，他の人の話や他の人が書いた本の文章など）に触れた場合でも，人はその言葉の字面^{じづら}をそのまま自分の頭の中にコピーするわけではない．その内容を，「なるほど，こういうことか」と一旦，自分の言葉で言い直してから頭の中に入れるのである．それはちょうど，黄色の蝶を見た子どもが，「この蝶は黄色い」と自分がもっている単語にそれを一旦変換することで頭の中に情報として取り入れて記憶するようにである．したがって，同じ話を聞いても，また同じ本を読んでも，人はその人の国語の能力以上のもの（＝自分の言葉への変換能力以上のもの）は自分の中に取り入れることは出来ないのである．

このように，国語の能力が高ければ，経験したものであれ，人の話や本の内容であれ，その時々に触れたものを豊かに正確に自分の言葉に変換出来る．そのため，本人も気づかないうちに，それらから常に豊かで正確な情報を取り入れている．ところが国語の能力が低ければ，同じものに触れても，それを貧弱で不正確にしか言葉に変換出来ない．そのため，本人はいかに多くのものに触れたつもりでも，それらから貧弱で不正確な情報しか取り入れていないのである．

また，人はこのように外界のものを情報として取り入れることだけでなく，その他の情報処理全般も（すなわちコンピュータにたとえれば，インプットだけでなく，記憶・演算やアウトプットも），同じようにかなりの大きな部分は国語を使って行なっている．すなわち，取り入れた情報を記憶したりそれを使って考えたり判断することや，他の人に向かって話をしたり文章を書いたりすることも，外界のものを情報として取り入れる際と同じように，主に国語の能力によって行なっている．たとえば，黄色い蝶について記憶したりそれについて考えたり，また人にそれについて話をしたりすることも，「黄色い蝶」という言葉によって行なっているのである．

このように，人はその情報処理全般を，主に国語の能力によって行なっている．したがって，国語の能力が高い人は，ちょうど基本性能の高いコンピュータのように，仕事や勉強の内容が何であれ，そこで取り扱われる情報を高いレベルで処理している．ところが国語の能力が低い人は，性能の低いコンピュータのように，どのような情報も低いレベルでしか処理出来ないでいる．そのため，前節

で見た調査結果のように、仕事での評価も学校での成績も、分野に関わりなくその人の国語の能力に比例することになっているのである。

3. 「情・意」の豊かさと活発さ

しかし情報処理というのは、「知・情・意」と言われる心の働きの中の「知」に関することである。それでは、その他の「情・意」の働きと国語の能力との関係はどのようなになっているのだろうか。

結論から言えば、「情・意」についても、それらがどれだけ適切に細やかに働くかはその人の国語の能力に大きく依存しているということである。

その理由は二つあるが、一つは、そもそも外界のものを豊かに正確に「知」の面で捉えることが出来なければ、それら外界のものに触発されて起こる「情・意」の働きも適切で細やかなものになることは難しいからである。外界のものは、いかに同じように見えても、それぞれが微妙に違っている。そして、国語の能力が高ければその細かな違いを捉えることが出来るため、それらにに応じて起こる「情・意」の働きも適切で細やかなものになる。ところが国語の能力が低ければ、そういったものを不正確で大雑把にしか捉えることが出来ないので、「情・意」の働きも不適切であったり細やかさのないものになってしまうのである。

たとえば、子どもに交通安全について教える際、このような状況の時には安全だが、このような状況の時にはよほど車に注意しなければ危険だと教えようとしても、子どもがその状況の違いを把握出来るだけの国語の能力をもっていなければその違いを理解出来ない。そしてそのような子どもは、安全と危険の状況の程度に応じて、「あぶなくない」とか「あぶない！」といった心の動きを適切に起こすことが出来ないのである。

またもう一つの理由は、「情・意」の働き自体が、その人がマスターしている言葉と結びつかなければ、「情・意」としての具体的な形をとれないからである。たとえば、「うれしい」とか「頑張る」という言葉をマスターしていなければ（その言葉を知っていなければ）、その感情の元となる心の動きはあっても、それが輪郭のはっきりした「うれしい」とか「頑張ろう」という情・意の働きとはならないのである。

そのことを、ドイツの教育哲学者のO・F・ボルノー（一九〇三～一九九一）は次のように説明している。

〔人の内面の〕喜びや悲しみ、愛や忍耐、退屈や期待、実直や自負、これらすべては言葉が人間に用意する語の導きのもとに……形成されるのです。このことは勿論、言葉が感情を簡単に無から創り出すという意味ではありません。何か或物が精神的生において既に現存していなければなりません。しかしそれはまだ形も無く捉えることもできないものであり、言葉によって予告された形式のなかへ注ぎ込むにつれて、——或いはよりよくいえば、言葉と結びつくにつれて初めて、その姿と、それ故その本来の現実性とを得るのであります。⁽⁸⁾

つまり、人の心はその時々状況に触発されて必ず何らかの動きを起こしている。しかしその動きは、言わば波のうねりのようなものであって、「うれしい」とか「頑張ろう」といった具体的な形になった「情・意」の動きではない。ところが、そうした言わば情・意の元となる心の動き(うねり)が、たとえば「うれしい」とか「頑張る」という言葉と結びつくと、そこで初めて輪郭のはっきりした「うれしい」とか「頑張ろう」といった具体的な情・意の動きとなるのである。それはちょうど、非常な高温に熱されてドロドロに溶けている鉄が、^{い が た} 鋳型に注がれることで初めて具体的な形をもつものに形成されるようにである。

したがって、人はマスターしている言葉の範囲内では(つまり、その人がもっている国語の能力の範囲内では)、輪郭のはっきりした情・意の動きはもてないことになる。「うれしい」という言葉をマスターしていなければ、「うれしい」とは思えないし、「頑張る」という言葉をマスターしていなければ、「頑張ろう」とは思えないのである。そのため、国語の能力の高い人は、うねりのような心の動きがいちいち細やかに輪郭のはっきりした「情・意」の動きとなる。ところが国語の能力の低い人は、うねりのような心の動きはあっても、それがなかなかそれ以上の情・意の動きとなることが出来ないのである。

4. 「やっても仕方がない」？

このように人の心は、「知・情・意」のどの面も、それがどれだけ豊かに的確に、また細やかに動くのかは、その人の国語の能力に大きく依存している。その

ため、そういった心の動きを育てようとするれば、国語の能力の養成を他のどのような能力の養成よりも最優先で行なわなければならないのである。

しかしそのように言うと、次の二つの否定的な態度が返ってくることがある。

一つは、たとえば高校生や大学生がよく言うのだが、「自分にはもともと国語の能力がないので、今さらその養成などをやっても無駄だ」というものである。そしてもう一つは、「日本人であれば日本語はだれでも出来るのだから、その能力の養成などをわざわざやる必要はない」というものである。

この二つはどちらも、「国語の能力の養成などやっても仕方がない」ということでは同じことを言っている。しかし、その理由は正反対である。すなわち一つは、「国語の能力は自分がないので」というものであり、他の一つは、「国語の能力はだれもがもっているのだ」というものだからである。

ところが国語の能力の養成は、「今さらやっても無駄なもの」でもなければ、「わざわざやる必要のないもの」でもない。やればだれもが例外なしに大きな成果をあげられるものだし、やるとやらないとではそこにはっきりと断絶が出来るほどの結果の違いが出るものなのである。

まず、どうして「今さらやっても無駄なもの」ではないのかというと、どのような人も圧倒的に多くの練習（もしくは学習）の蓄積を国語についてはやってきているからである。だれでも生まれた途端に、周囲から「かわいい」などと声をかけられ、早速、国語のヒアリングの練習を始めている。そしてその後も、朝から晩まで、何をするにしても、国語に囲まれ、国語を使いながらなのである。友だちと遊ぶことや喧嘩をすることも、学校の勉強も、家族とのおしゃべりも、一人で何かを考えることも、全て国語に囲まれ、国語を使いながらやってきているのである。

そのため人は、いかに本人は気づいていなくても、生まれてからその時までの「全て」とも言える時間を、国語の練習をしながら過ごしてきたのである。一日のうちの起きている時間を十六時間とすれば、十歳の子どもは、「十六時間」×「三六五日」×「十年」^{イコール}＝「五万八千四百時間」の国語の練習をしてきており、二十歳の人はその倍の「十一万六千八百時間」の練習をしてきている。また、夢を見ることや寝言を言うことも国語を使ってやっているのだから、実際にはそれ以上の時間を人は国語の練習をしてきていることになる。そしてそのように、生まれた時からこれまで休みなく練習をし続けてきたものが他にあるのかというと、それは身体だけである。身体であれば、それこそ生まれた時から瞬時も

休まず動かし続けてきており、動かすことは練習をすることだから、身体についてはほとんど全ての時間、練習をしてきている。しかし人は、身体以外には、国語以外にそれほどの練習をしてきたものはもたないのである。

たとえば、楽器の練習や外国語の勉強を毎日欠かさずに五時間やり、それを十年間続けたとすると、その練習時間の合計は「一万八千二百五十時間」である。そのような練習や勉強は他のほとんどのことを犠牲にするほどの厳しいものだろう。しかしそれでも、その十年間の練習時間の合計は国語の、何も気づかずに行なっていた練習の二・八年分にしかないのである。

したがって、「国語の能力がない」という人は実際にはいないのであって、だれもが国語の能力については他のどのような能力よりも圧倒的に多くの蓄積をしてきている。そのため、楽器の練習や外国語の勉強を少々やったくらいでは到達出来ない自由自在なレベルを、だれもが国語においては達成しているのである。

しかしそうであれば逆に、「日本人であればだれもが日本語は出来るのだから、わざわざその能力の養成などをする必要はない」ということにならないだろうか。

たしかに、国語の練習の蓄積量は他の何よりも圧倒的に多い。そのため、その能力のレベルは他のどのような能力よりも圧倒的に高い。しかし、生活の中で身につけた国語の能力というのは、あくまでも基礎体力のようなものである。走ることにたとえると、朝から晩まで野山を走り回ることによって身につけた抜群の心肺機能や脚力のようなものである。そして、そのような基礎体力をもっていれば、たしかに走ることにについての潜在能力はきわめて高い。しかしだからといって、そのまま陸上競技に出て良い成績を出せるのかというと、必ずしもそうはいかない。やはり、きちんとした練習をして腕の振り方などについての正しいフォームを身につけなければ、速いタイムは出せないのである。

それと同じように、基礎体力としての国語の能力がいくら高くても、そのままでは仕事や勉強での成果には必ずしも結びつかない。日常生活の当座当座をしのぐだけであれば、生活の中で身につけた国語の能力で不自由はないかもしれない。しかし、仕事や勉強や生活の場で起こる様々な問題に何らかの解決をつける形で適切に対処していけるかどうかは、国語についてのきちんとした練習や学習をしたかどうかで大きな差がついてしまうのである。

なぜなら、一つ一つの問題に適切に対処していくよう「知・情・意」を細かく正確にまた豊かに働かせるためには、生活の中で身につけた基礎体力としての国

語の能力だけでは不十分で、陸上競技と同じように、それについてのきちんとした練習や学習をしなければなかなか身につかないからである。

しかし、基礎体力としての国語の能力はすでにだれもが圧倒的に高いものを持っている。そのため、その「きちんとした練習や学習」というのも、ほんの少しすればよいだけである。それはちょうど、抜群に高い心肺機能や脚力をもっていれば、ほんの少しのきちんとした練習ですぐに陸上競技で好成績を出せるようになるのと同じである。

このように、国語の能力を養成するための練習や学習ほど報われることの大きなものはほかにはない。ほんの少しするだけで、だれもが仕事、勉強、生活といったあらゆる場でそれまでとは全く違った成果をすぐに出せるようになるからである。しかしまた、その練習や学習ほどしないわけにはいかないものもほかにはない。それをしなければ、どのような場でどれほど一生懸命に努力をしても、それに見合うだけの成果はなかなか得られないからである。こういった意味で、国語の能力の養成こそは、他のどのような能力の養成よりも最優先で行なわなければならないほとんど唯一のものと言える。またその養成をきちんと行なわなければ、総合的な学習の時間が目指す、様々な見方や考え方を横断的・総合的に活用し、実社会や実生活における様々な課題に積極的・探求的に取り組む能力の養成という目標を達成することは出来ないのである。

文 献

※引用文中の〔 〕は、全て引用者によるものである。また、ルビは引用者が適宜、追加した。

- (1)石井勲『日本語の再発見』日本教文社、1988年、p.37
- (2)ブレイク・クラーク「言葉の不思議な力」、『リーダーズ・ダイジェスト』1961年7月号、pp.85-87
- (3)同上書、p.87
- (4)同上書、p.87
- (5)西尾幹二『日本の教育 知恵と矛盾』中公叢書、1985年、p.307
- (6)石井勲、同前書、p.27
- (7)石井勲、同上書、pp.27-28

- (8)O・F・ボルノー『新しい教育と哲学——ボルノー講演集——』玉川大学出版部，1968 年，p.225

平成 30 年 1 月 31 日受理

〔論文〕

文章を書く能力および コミュニケーション能力の育成方法

立花 均

(元 久留米工業大学共通教育科)

1. 文章を書く能力とコミュニケーション能力の必要性

総合的な学習の時間では、生徒が将来、実社会や実生活においてどのような課題にも積極的・探求的に取り組めるような能力の養成をしなければならない。

そういった能力としてはいろいろなものが考えられる。しかし、それらの中でも特に大切なのが、文章を書く能力とコミュニケーション能力である。なぜなら、実社会や実生活においては、ほとんどの課題に他の人と関係する中で取り組まなければならない。それをする際、特に必要なのが、自分の考えを文章化して他の人に分かりやすく伝える能力および他の人と密接なコミュニケーションをとる能力だからである。

それではそれらの能力はどのようにして育成すればよいのだろうか。

生徒に文章を書く能力を身につけさせるには、最終的には、文章を書く経験を実際に積ませる必要がある。また、コミュニケーション能力を身につけさせるには、他の人とコミュニケーションをとる経験を実際に積ませる必要がある。

しかし、それらの経験をいきなり生徒にさせても、それらのきちんとした能力を身につけさせることが出来るとは限らない。それは、たとえば野球でいきなりバットの素振りをたくさんさせても、バットスイングのきちんとした能力を身につけさせられるとは限らないのと同様である。下手なフォームでたくさん素振りをさせれば、かえって悪いフォームを身につけさせてしまうだけだからである。そしてそうならならためには、実際に素振りをさせる前に、どのようなフォームでバットを振ればよいのかをきちんと説明し理解させなければならない。それと同じように、生徒に実際に文章を書く経験やコミュニケーションをとる経験を積ませる前には、そ

れをどのように行なえばよいのか、そのポイントをきちんと説明し理解させておかなければならないのである。

ここではそのような目的のため、文章を書くこととコミュニケーションをとることのポイントをそれぞれ見ていくことにする。

2. 文章能力

まず、文章を書くポイントを項目に分けて見ていくことにする。

(1)文（センテンス）は出来るだけ短くする

- ①明晰で分かりやすい文章を書くには、一つ一つの文は短ければ短いほどよい。
- ②見当として、全ての文は 60 字以内（原稿用紙では 3 行以内）に収める。
- ③専門的なことについて書く場合には、60 字を超える文を入れざるを得ない。そしてその場合には、何度でも文章を書き直すことが必要になる。
- ④しかし、一度か二度しか書き直しが出来ない場合には、全ての文が 60 字を超えないようにしておくといよい。

(2)段落をきちんと作る

- ①200 字以下の文章では段落は必要ない。400 字以上では段落は必須となる。
- ②段落に従って、話が A→B→C→D と展開していなければならない。
- ③A の話が終わったら、行を変え、一字下げて B の話に進む。
A の話の途中で行変えをしてはいけない。
行変えをせずに B の話に進んではいけない。
- ④段落がきちんと出来ていないもの（多過ぎたり少な過ぎたりするもの）は「子供の文章」になってしまう。
段落をきちんと作るだけで「大人（社会人）の文章」になる。
- ⑤400 字以上の文章を書く時には、「段落を作らなければならない」という強迫観念をもって書く。
400 字では 4 つ前後（ 4 ± 1 ）の段落を作る。
- ⑥「段落を作らなければならない」という強迫観念をもっていないと、A、B、C、D の内容がもつれたまま最初からいきなり出てきて、最後までもつれたまま行ってしまう。
段落を作るという強迫観念があると、そのもつれた話を A、B、C、D に分けることになる。
- ⑦読み手にとっても、段落によって、「A の話が終わって次に B の話に行くのだな」ということが分かる。

(3)「結論」あるいは「話の大枠」「自分の立場」を最初に言う.

- ①前置きが長くなってはいけない.とにかく最初に,「結論」や「話の大枠」「自分の立場」を示さなければならない.
- ②文章を書き慣れない人は,自分の「結論」を言う前にその「根拠」を説明しておかなければならないと思ってしまう.
- ③そのため,「根拠」を長々と説明した後,ようやく「故に」と言って「結論」を言う形になりやすい.そしてこれが,分かりにくい文章の典型である.
- ④まず「結論」を最初に端的に示す.そして,「なぜならば」と言ってその「根拠」を説明する.
- ⑤そのようにすれば,その文章の「目的地」が読む人に最初に分かるので,その後の話が追える.目的地が分からずに長々と「根拠」を説明されても,「この人は何のためにこんなことを長々と説明しているのだろうか」と,読んでいてさっぱり分からない.
- ⑥かなり乱暴に「いきなり結論」を最初に述べなければならない.長々と前置きをしてはいけない.外堀を埋めるという手順をきちんと踏んでから本丸を攻めようなどと考えるはいけない.いきなり乱暴に最初から本丸を攻めなければならない.
- ⑦段落の内容で言えば, $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ の A で結論を示さなければならない.
- ⑧そして,最後の段落でその結論を再度示すことになるので, D は実は A' となる.
- ⑨つまり,段落は, $A(\text{結論}) \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow A'(\text{結論})$ となっていなければならない.

※以上の3つ,すなわち,(1)全ての文を短くし,(2)段落をきちんと作り,(3)結論を最初に言う,だけで合格点を出せる文章—つまり読める文章—になる.逆に言うと,このうちの一つが欠けても合格点は出せなくなる.

(4)背伸びをせずに「個人的見解」を「礼儀正しく」「分かりやすく」書くこと

- ①背伸びをして立派なことを書こうとすると,誰かがどこかで言っているような(どこかで聞いたような)ことを下手に要約した,面白くも何ともない文章になってしまう.
- ②文章に正解や模範解答はない.「その人にしか書けない個人的な見解」を書かなければ,誰も読んでくれない.
- ③個人的見解を書くことは,自分の考えを相手に押しつけることではない.「自分はこう考えます」ということで,コミュニケーションのボールを相手に投げるだけである.

- ④「個人的見解」というボールを相手に投げる時に大切なことは次の2つである。
 - i) 礼儀正しく
 - ii) 分かりやすく
- ⑤就職試験で「～についてどう考えますか」と聞かれても、会社が学生にアドバイスを求めているわけではない。その問題についてのその学生の個人的見解を聞くことで、その学生の考え方を知りたいだけである。その時に個人的見解を述べなければ、会社としてはその学生のことが分からなかったということで不採用を出すしかない。

(5)とにかく思い切って1つのことを書き始める

- ① バットは振らなければ始まらないのと同様、文章は書き始めなければ始まらない。
- ② 何らかのアイデア（書くテーマ）を思いついたら、とにかくまず書き始める。
- ③ 1つの文章にあれもこれも書こうとしてはいけない。
- ④ 1つの文章の論点や切り口は1つである。1つのことだけを論じるのが文章である。
- ⑤ レポートなどを書く際、書き慣れない人は、「準備を万全に整えてからでないと書き始められない」と思いがちである。つまり、「準備完了」⇒「書く」という順序で考えがちである。
- ⑥ しかし、実際に書き始めてみないと、自分の論の展開にとって何が必要で準備しなければならないことが分からない場合が多い。つまり、「書き始める」⇒「準備（詳しく調べる）」の順序になる場合がほとんどである。
- ⑦ 準備をするためにも、まず書き始めてみるのが大切である。

(6)文章全体は、「一つのストーリー」によって構成されていなければならない

- ① 自分の立場や意見を述べるにしろ、プリントや本を読んでその内容を要約するにしろ、一つの文章には、その人が構成した（内容要約の際には、再構成した）一つのストーリーが出来ていなければならない。
- ② ストーリーが構成（または再構成）されていない文章とは、あっちの内容とこっちの内容をただつぎはぎしただけのものである。軽自動車にトラックの大きなタイヤをつけたような、ヘンテコな、何を言っているのか分からない文章になってしまう。
- ③ 「個人的見解」が、「1つの論点や切り口」から「結論を最初に言う」形で「段落に従って」 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow A'$ と展開するよう、^{ストーリー}「話」が構成されていなければならない。

(7)具体例, エピソードを出す

- ①「結論」とその「根拠」を説明したら,「後は何も書くことはありません」と言う人がいる.そして,「原稿用紙が埋まりません」と言う.
- ②段落で言えば, A で結論を書き, B でその根拠を説明したら, それ以上, 書けないというのである.
- ③「結論」とその「根拠」を説明しただけでは,読んでいる人に具体的なイメージを起こさせることは出来ない.そのため,読み終わった後にすぐその内容を忘れられるような文章にしかない.(就職活動の時に書く文章では特にこの点を注意しておく必要がある)
- ④そうならないためには,必ず具体例を出さなければならない.
- ⑤段落で言えば, A(結論)→B(根拠の説明) の次に C の所で,「たとえば」として具体例を出すのである.
- ⑥「適切な具体例を一つ出せば,その文章は“勝ち”」とさえ言える.そのため,必死で具体例を考えなければならない.
- ⑦具体例を二つも三つも出すと,かえって話をぼやけたものにしてしまう.適切な具体例を一つ出し,それを丁寧に描写するのがよい.
- ⑧自分の体験したエピソードは特に有効である.
- ⑨具体例を書く時には,読んでいる人がイメージをつかみやすいように書く.たとえば「自分は昔」といった書き方では,読んでいる人はイメージをつかめない.「自分が中学3年生の時」と書けば,イメージがつかめる.また,「近所の人」ではイメージをつかめない.「近所のおじさん」なのか「近所のおばさん」なのかを書かなければならない.

(8)対比は必ず用いる

- ①具体例は適切なものを思いつかない時には出さなくてもよい.不適切なものなら出さない方がよい.しかし対比は必ず用いなければならない.
- ②Yのことを説明しようとして,Yのことをいくら詳しく説明しても,読んでいる人にそのポイントを分らせることは困難(無理)である.
- ③Yのことを説明する際には,「XではなくY」と言わなければならない.
- ④ディーゼルエンジンのことをいくら詳しく説明しても,その特徴は説明出来ない.必ずガソリンエンジンと対比しながら説明しなければならない.
- ⑤論全体の基本構成に対比を使うだけでなく,一つ一つの文章にも,出来る限り次のような対比を入れるとよい.それは,「～は～である.」と書く所を,「～は,～と違って,～である.」と書くのである.

⑥対比がふんだんに入った文章を読んだ人は、必ず、「なぜだか分からないがこの文章はよく分かる」と言う。

⑦自分の考えを示す際には、i)「以前、自分はこのように考えていたが、そうではなくて」とか、ii)「多くの人はこのように考えているが、そうではなくて」といった対比を使うとよい。

(9)自分の書いた文章は必ず読み直す

①文章の書き方の最終テクニックは、自分の書いた文章を読み直すことである。

②文章を書いたら、「もう見たくない。早く提出してセイセイしたい」と考える人も多い。しかし、文章を書いたら、書きっぱなしにしてはいけない。必ず読み直す必要がある。

③まず誤字、脱字がないかどうかを点検する。

④それに加えて、読んでみて内容がすらすらと頭に入らない所があれば訂正する。

⑤「読み直す」⇒「書き直す」⇒「読み直す」⇒「書き直す」……

3. コミュニケーション能力

次に、コミュニケーションをとるポイントがどのようなものであるのかを説明していきたい。ただし、説明の便宜上、「面接試験」という具体的な状況を想定して説明を行なうことにする。

まず面接試験というと、「自分を高く評価してもらうためのもの」と思っている人がいる。しかし面接試験とはそのようなものではなく、「自分という人間を知ってもらうためのもの」で、そのために面接者ときちんとしたコミュニケーションを成立させなければならず、またそのことによって同時にコミュニケーション能力のあることを示さなければならないものである。この考えの切り替えをしなければ、面接試験をうまく乗り切ることは出来ない。

そういった観点から、以下ではコミュニケーション能力というものをいくつかの項目に分けて説明していくことにする。

(1)「コミュニケーション」とは何かというと、「会話のキャッチボール」である。

①何をするにしても、一番求められるのは、「コミュニケーション能力」である。

②そのため、どのような面接でも一番チェックされるのは、その人がコミュニケーション能力をもっているかどうかである。

③そしてそれは、要するに、「会話のキャッチボールが出来る能力」ということである。

- ④高校生や大学生が面接試験で失敗するのは次のようなパターンである。それは、

「面接では、つまずかずに ^{りゅうちょう} 流暢に話が出来なければならない」と思い込んでいて覚えてきた原稿を一生懸命に一方的に読むように話してしまうというパターンである。

- ⑤しかしそうすると、面接担当者と会話のキャッチボールが出来ず、「コミュニケーション能力がない人」と判断されてしまうことになってしまう。

- ⑥【参考資料】『就職ジャーナル』より

「だから、あなたは落とされる！—人事の証言から不採用の原因を徹底究明」

◎面接は「会話」。あなたがしているのは、ただの「自己主張」

「大前提として、会話のキャッチボールができない、コミュニケーションがとれない学生には不安を感じます」

そう話すのは、流通会社の人事担当者。同社だけではなく、今回取材したすべての企業の人事担当者が「コミュニケーションの不成立」を不採用の原因として挙げている。「コミュニケーション」とは、「話を聞き、回答する」というシンプルな受け答えさえできれば成立するもの。そんな基本的なことができていないというのは、一体どういうことなのだろうか。

ここで指摘されるコミュニケーションとは、決して「流暢に話す」ことではない。人事の質問の意図を汲み取り、いかに的確な回答をするかが重要なのだ。

どれだけ流暢に話すことができて、それが質問に対する答えになっていなければ、コミュニケーションが成立しているとは言えない。

「準備をしてきたのはわかるんですが、質問を無視して、延々と自己PRを続ける人は困りますね。」

- ⑦会話のキャッチボールが成り立つために一番必要なのは、面接担当者の言うことをまずしっかりと受け取ることである。相手の投げたボールをきちんとキャッチする能力が、コミュニケーション能力の前半部である。

- ⑧それが出来ている人の好感度は ^{まる}○ で、それが出来ていない人の好感度は ^{ばつ}× となる。

まずは、相手の言っていることをきちんと受け取ることに努める必要がある。

- ⑨相手の投げたボールをきちんとキャッチしたら、次にやることは、自分のボールを相手に投げ返すことである。「自分のボールを投げ返せるかどうか」が、コミュニケーション能力の後半部となる。

- ⑩それでは、「自分のボール」とはどのようなものなのか。

- ⑪採用側が面接を行なうのは、「その人がどのような人かを知りたい」からである。その人がどのような人であるのかが分からなければ採用のしようはないのである。
- ⑫ところが、多くの高校生や大学生は、「面接では何か立派なことを言って自分を高く評価してもらおう」と勘違いしている。そして背伸びをして、どこかでだれかが(評論家や先生たちが)言ったり書いたりしていたことをつなぎ合わせたようなことを言うのが「立派なこと」と思っている。「自分で考えたようなことはつまらないことで、言っても仕方がない」と思っているのである。
- ⑬成績の非常に良い二人の大学生が、いくつ面接を受けても落ちてくるので周囲の人が不思議がっていた。そこで面接の様子を本人たちに聞いてみると、案の定、彼らは、「面接では立派なことを言わなければならない」と思い込んでいて、人の言ったことをつなぎ合わせたようなことしか言っていなかったのである。
- ⑭しかし面接担当者としては、他の人が言ったことをつなぎ合わせたような「立派なこと」を言われても、その人がどのような人であるのか全く分からない。そして、どのような人であるのかが分からなければ、その人を採用しようがないのである。
- ⑮他の人が言っていることをつなぎ合わせたような話をする、不採用になる危険性は高い。そしてそれは、その人が劣っていると判断されたからではなく、その人がどのような人かが分からなかったからなのである。つまり、「^{ぼつ}×」がつけられたから落とされたのではなく、「^{クエスチョンマーク}？」がつけられたから落とされたのである。
- ⑯上記⑬の2人の学生に、「面接担当者は、あなたから何か立派な話を聞きたいわけではなく、あなたがどういう人かを知りたいのですから、背伸びをせずに自分の考えを素直に話して下さい」とアドバイスした。すると、すぐに次の試験からは受かるようになった。
- ⑰また、「自分の考えを述べると、相手に自分の考えを押しつけることになるのではないか」と思い、自分の考えをはっきり言わない人もいる。
- ⑱自分の考えを述べることは、自分の考えを相手に押しつけることではない。自分の考えを述べて自分のボールを返すことによって初めて相手との会話のキャッチボールが成り立つのである。背伸びせずに高校生や大学生らしい自分の考えを素直に述べなければならない(自分のボールを返さなければならない)。そして、それをすることが高い好感度を得る一番の方法なのである。

⑱ 次の二つを守れば、自分の考えを相手に押しつけることには決してならない。

i) 分かりやすく

ii) 礼儀正しく

⑳ 以上のように、

i) 相手の言っていることをきちんと受け取り（相手のボールをキャッチして）

ii) 背伸びをせずに自分の考えを分かりやすく礼儀正しく述べる（自分のボールを投げ返す）

というのが、どのような場合にも相手が求めている会話のキャッチボールである。

i) → ii) という順番が大事で、また、i) と ii) の両方が必要である。

(2) ボールを投げ返す際の「話の材料」

① ボールを投げ返して、自分がどのような人間であるのかを知ってもらうには、「話の材料」を何にするかが決定的に重要になる。

② まず、「これを話の材料にしてはいけない」という注意事項が2つある。

③ 一つは、「志望動機」を述べる際、「志望する大学や会社などのパンフレットに書いてあることを話の材料にしてはいけない」ということである。

「志望動機を述べて下さい」と言われて、「貴大学(もしくは御社)は〇〇といった素晴らしい所なので志望しました」などといって、「〇〇」の所でその大学や会社のパンフレットに書いてあることをそのまま言う人がいる。

しかし、面接担当者は、自分の大学や会社のことを知りたくてあなたと面接をしているわけではなく、あなたのことを知りたくてあなたと面接をしているのである。それなのに、あなた自身のことやあなたの考えは話さずに大学や会社のことを話されても、あなたのことが分かるはずはない。そしてあなたのことが「^{クエスチョンマーク}？」で終われば、あなたを採用することは出来ないのである。

④ 2つ目の注意は、「自己PR」を述べる際、「人の性格を言い表す一般的な言葉だけで自分についての説明がすむと思ってはいけない」ということである。

たとえば、「忍耐強いです」などといった言葉だけで自分についての説明がすむと思ってはいけない。「忍耐強い」という言葉だけでは、面接担当者はあなたの事は何も分からないのである。

⑤ それでは、「志望動機」を述べる際にも「自己PR」を述べる際にも、それについて述べながら自分のことを面接担当者に短い時間の中で分かってもらうためには、何を話の材料にすればよいのだろうか。

それは、「自分についてのエピソード」である。クラブ活動で全国大会に出場したといったような「実績」の話ではなく、「体験したエピソード」こそが、あなたがどのような人であるのかを短い時間の中で面接担当者に、「あーなるほど、あなたがどのような人かよく分かりました」と確実に言わせることのできる話の材料である。もちろん実績の話を出しても構わないのだが、それだけでは自分という人間について知ってもらうのには不十分だということである。

したがって、自分の過去に何らかの「エピソード」を探してきて、それを柱にして、「志望動機」なり「自己PR」なりのストーリーを組み立てることである。

⑥本人からすれば、「こんなことを話しても仕方がない」と思うかもしれない。しかし面接というのは、「自分を売り込む場」ではなく、「自分を知ってもらう場」なのである。大きな話では、かえって自分のことを知ってもらうことが難しくなる。ささやかであっても具体的に体験したことの話の方が効果的なのである。

⑦たとえば、クラブで全国大会に出場したことを言われても、面接担当者は、「ほーすごいですね」とは思っても、あなたのことについてはほとんど何も分からない。ところが、部室がよごれていたのを友だちと相談して一緒に自発的に掃除をした時の苦労話をされると、面接担当者は、あなたがどのような人なのかというイメージをはっきりともつことが出来る。

⑧そういった「体験したエピソード」については、本人は、「何も面接試験で言うほどの立派なことではない」と思いがちである。しかし、本人が「何も立派なことではない」と思うようなことほど、あなたという人間を知ってもらうのに一番良い材料である場合がむしろ多い。

⑨もう一つは、「一つの問題を何とか工夫して解決した」といったエピソードである。(部室の掃除の話などもそうである。)

たとえば、「文化祭実行委員を友だちと一緒にやって文化祭を成功させました」といったことで話が終わったのでは、面接担当者にはあなたのことは何も分からない。その時にどのような問題があったのでそれを友だちと一緒にどのように解決したかといったエピソードを出さなければ、せっかく実行委員をしていても面接担当者にはあなたのことは何も分かってもらえないのである。

「直面した具体的な問題」と「それについての工夫改善の取り組み」のストーリーを出せると一番良いのではないだろうか。

(3)まとめとして(読売新聞「就職ON SPECIAL」(平成29年9月5日)の記事より)

① 「自己PR 話題性より独自性」

……面接で尋ねられることが多い「自己PR」や「学生時代に力を入れたこと」が、自分にはないと悩む就活生は多い。就職・採用コンサルタントの沢本

和重さんは、「採用する側が聞きたいのは、何をしたかではなく、それを『なぜ』『どんな意識で』したかで、そこから仕事に向き合う姿勢を見ている」と指摘する。

「サークルの部長を務めました」ではなく、「部長だったとき、皆が話を聞いてくれず苦勞した」ため、「自分が皆の話を傾聴できるよう努力しました」などとなげば、人となりもわかるし、独自性を打ち出せるという。

「力を入れたことがないと思う学生でも、本当は何かあるはず。知人や家族ら周囲に相談すると見つかりやすい」と沢本さんはアドバイスしている。

②^{み うらあさ み}水ト麻美さんの就職活動体験談（日本テレビアナウンサー。慶応大学卒業後、日本テレビ入社。「好きな女性アナウンサーランキング」で13年から4年連続トップ）

「等身大で正直に」

大学では英米文学を専攻しましたが、英語はほとんど話せませんでした。自慢できる趣味や特技もなかった。だから就職活動はつらかったです。エントリーシート（応募書類）では自己PRを書かなければならないのに、何も思いつかない。長所を挙げようとしても一個もなく、がくぜんとしました。

小学生のころから、漫然とアナウンサーになりたいと思っていました。でも、そのために何かをしてきたわけではなく、その時にやりたいことをしてきました。

中学、高校の部活動や大学のサークルでバレーボールを約10年続けましたが、実力は予選で敗退する程度。大学時代の夏休みや冬休みは、塾講師のアルバイトに費やしましたが、教えた子どもを難関校に何人も進学させたといった実績はありません。

大学3年生になって、就活を始めると、私と同じアナウンサー志望の学生たちは、何かの大会に優勝していたり、驚くような資格を持っていたりと、経歴ではかなわないことがわかりました。これはダメだ。あるもので勝負するしかないと思いました。これまで自分が頑張ったことの中に、自分らしさが詰まっていると考え、それを必死で拾い出しました。ゼミの合宿の野球大会で全力疾走した話、バレーボールのチームでは、弱いなりにみんなで1勝でもできるように工夫をして練習したこと、塾の理科の授業で私の話をなかなか聞いてくれない小学校低学年の子に、どうしたらこちらを向いてもらえるか何時間もかけて考えたこと。

東京のテレビ局を4社受けて、最初の3社は不採用。落ち込んで泣きました。

それでも、「等身大で臨んで入れなかったら仕方がない。わからないことはわからないと正直に言って、面接官と会話をするつもりで選考に臨もう」という気持ちで今の会社を受け、採用されました。

結果的に、立派な経歴がなくても就活はできました。エントリーシートに書く内容のために無理やり今から何かを始めるのではなく、小さなことでも自分が全力投球したことで勝負してもいいのではないのでしょうか。そして面接では会話を楽しみましょう。

平成 30 年 1 月 31 日受理